

『金瓶梅』にみられる住まいの空間構成に関する研究 書房における生活様式と室内意匠について

藤原美樹* 石丸 進** 松本静夫*

Study on the Room Arrangement in the Novel "JIN PING MEI".
The Life-style and Interior Design in a Study (shū fáng) .

Miki FUJIWARA* Susumu ISHIMARU** Shizuo MATSUMOTO*

ABSTRACT

This paper aims to make clear the private lifestyle and interior design of bureaucrats, mainly concerning to the study house "HISUI house" in the novel "JIN PIN MEI". As a result, next five points become clear: 1) In general bureaucrats are persons of culture and have a public life-style and a mental private lifestyle. The latter is mainly performed in a study. 2) An ideal study house should have nature inside and outside of its room and be purified. They place stationery and antique on the desk and spend spiritual life, appreciating them. 3) They design stationery, furniture and interior to make their spiritual and healthy lives enrich. 4) The term "HISUI" is used for giving the house the meaning of a wish for ageless and immortal life and a desire for productivity and revival. 5) The "Dōng pō chair" designed and used by *Sū shì* is a chair for health and spiritual calmness. Its motif of the top of the backrest is designed from a legendary plant called "líng zhī" which grows in a sacred place. It seems that the "Dōng pō chair" is the original model of "Tài shī chair" in the period of Qing Dynasty .

キーワード： 金瓶梅, 翡翠軒, 文人, 蘇軾, 東坡椅

keywords : *JIN PING MEI, HISUI-house, scholar, Sū shì, dōng pō-chair (dōng pō yì)*

1. はじめに

本研究は、『金瓶梅』の記述 [1] や挿図 [2] を主な文献史料として、明代の豪商一家の生活様式と室内意匠の機能的、装飾的効果およびその時代の嗜好性や嗜好性について明らかにすることを目的とする一連の研究である。

『金瓶梅』にみえる生活様式は、多彩かつ詳細であり、この時代の一級の歴史的民俗的史料である。

本稿では、『金瓶梅』にみえる書房のうち、主人公・西門慶の夏用の書房(書齋)「翡翠軒」を中心に、西門慶の私生活様式と室内意匠とのかかわりについて検証を試みる。

この時代、文人、士大夫(官僚)、豪商たちは、隠逸の場所として、私家庭園を築き、神仙の場所を求めた。西門慶は、当時の官商 [3] の典型として描かれている

ため、文人と士大夫の思想と生活様式との関係を考察することにより、その一端を明らかにするものである。

さらに、これまで実体のつかめなかった設計者としての文人とのかかわり、特に北宋代の文人・蘇軾(號は東坡居士)が設計し、愛用したとされる坐具「東坡椅」の復元を試み、その根底にある設計思想について検証する。

2. 文人と士大夫の思想と生活様式

2.1 文人の思想と生活様式

「文人」という語彙がみられる文献は、中国最古の詩篇『詩経』とされ、「大雅」江漢篇の一節(釐爾圭瓊 告于文人 于周受命 虎拜稽首)に、「爾に圭瓊 文人に告げよ 周に命を受け 虎 拜して稽首す」とあり、その注釈に「文人は文徳の人なり」(「毛氏伝」漢代)と

ある [4]。文徳の人とは、学問と徳に秀でた文人をいう。六朝時代(222-589年)には、文人は貴族化(世襲化)し、詩文などに沈溺し、士大夫の仕事は俗なるものと考えられるようになる。その背景には、老荘の道家思想があり [5]、それは、儒家思想と並んで中国の主要思想であり、積極的に政治に関わり、経世済民を基本とする儒教よりも、官僚生活から身を引く老荘思想が広く官僚や貴族に浸透した。

唐代(618-907年)には、科挙制度が整備され、世襲貴族の特権階級ではなくなる。士大夫は、厳しい職務を果たし、私生活においては風流韻事を中心とした、書画ほか芸術の趣味趣向の生活であった。

『金瓶梅』の時代、明代(1368-1644年)には、風雅の追求のみに傾倒する文人が多数いた。古くは、道義的な面が強調されていたが、時代が下がるにつれ、文人は風流を解す人というようになる。風雅な趣味生活やその生き方を「文人趣味」とよび、特に、書房において使用される、筆・墨・硯・紙を単なる道具としてみるのではなく、それ自体を鑑賞し、愛玩する趣味をいい [6]、それを、文房四宝とよび、宋代に華やかな展開がみられる [7]。

この時代には、書画、金石碑帖、古銅器、文房具から香茶、花木にいたるまで、多種多様の譜録が著される。その中で特に趙希鵠『洞天清録集』は、宋代文人の趣味に関する書を代表するものである [8]。洞天とは、仙人の住む洞府を意味し、仙界の場所をいう。

2.2 士大夫の思想と生活様式

士大夫は、封建社会の官僚階層知識層を指す。北宋以降では、科挙官僚、地主、文人の三者を兼ね備えた存在を指す。この時代の男性は、科挙試験に合格する必要があり、試験の内容は、時代ごとに変化がみられるが、中心は儒教的な素養を問うものであった。その士大夫は、仙界に隠遁するのが理想とされ、私的生活では、邸宅の私家園林内にストレスの解消と精神の安寧を求めて隠遁するための場所として書房をつくった。中国文人の生活には、儒学思想の「雅」を求める思想と道家思想の孤独に個人の浄化につとめる「清」を求める思想がある [9]。

宋代の文人・林洪の『山家清事』では、山奥に家を建て自然とともに生きることについて述べられ [10]、実際に仙界に住まう人の生活を主題とする。宋代以降、次第に書房を中心とした生活文化が形成される。

「文人趣味」の思想は、儒教、仏教、道教のいずれの要素もみえるが、中心は、道教思想であり、仙界にその理想が求められる。

3. 生活様式の「表」と「裏」

士大夫は文人でもあり、文人は士大夫でなければな

らない。士大夫(文人)の生活様式には、表と裏の二面性がみえる [11]。

表社会の中心は、士大夫の階級であり、儒教思想としての「礼」に象徴される。それを明確に表した場所は邸宅内中心の大廳であり、それは公的接客の場所である。それに対して内面を満足させる私的な場所は、私家園林内とその中に建てられた書房である。高濂『遵生八牋』 [12]、屠隆『考槃余事』 [13]、それらを底本とした書、文震亨『長物志』 [14] にみえるように快適性が迫られる。

『考槃余事』、その後の『長物志』、「室廬」に、文人たちの理想とする生活環境についての次のような記述がある。

「書齋は明るくて静かなのがよい。あまり開放してはいけない。明るくて静かであれば心を爽やかにすることができるし、開放しは目を悪くする。中庭には盆景の建蘭(蘭の種類)を一二本並べ、窓に近い所に金魚を五匹か七匹鉢に放ち、傍らに洗硯池(硯を洗う池)をつくる。(中略)書齋のなかの几榻、琴劍、書画、鼎硯の類は製作の俗でないものを用い、その並べ方が恰好になっているならば清賞にかなうであろう。春の日長には坐り暮らし、秋の夜長は文に親しみ、心を乱すこともなく、いつまでもこうして年を終えることができよう。もし僮(使用人)が慣れてなく、客が佳流の人でなければはいらせない」(『考槃余事』)。

「文人は、山水の中に住むのがいい。山水の間に住むのがもっともよい。次が村に住むこと、ついで郊外に住むことである。我々は山林に隠遁して、漢代の隠者のあとを追うことはできない。都市の中に住むのであるから、庭は典雅に清潔にし、部屋は清らかでおちついたふうを保つ必要がある。(中略)書齋は幽遠なる人物の境地を有するのがよい。佳木奇竹を植え、金石圖書を並べなければならない。住むものには老いを忘れさせ、泊まる者には帰ることを忘れさせ、遊びに訪れた者には疲れを忘れさせる。酷暑であっても涼しさを感じ、酷暑でも暖かさを得ることができる」(『長物志』「室廬」)。

これらの書より、文人は、書房を囲む環境として、植物、盆景、池など自然を重要視し、自然の中に隠逸する場所を求めたことがわかる [15]。

本来は、仙界や山奥に隠逸するのが理想としながら、現実的には、邸宅の傍らに、自然の山水を模した自然を人工的に築き、俗世間の中に隠逸する場所を求めた [16]。園林内の書房にすまい、創作を行い、趣味の生活に精神の安寧を求め、隠逸の場所とした。室内は清浄にし、風流なものを配置した。

士大夫の表の生活様式は、儒教思想を中心とした礼のための公的生活様式である。裏の生活様式、すなわち士大夫の内面の生活様式は、書房における、文人としての道教思想を中心とした精神性重視の私的生活様式である。

4. 「翡翠軒」の生活様式と室内意匠

4.1 文人と室内意匠について

文人たちは、精神性重視の生活に相応しいものとして文房具をはじめ、道具や生活空間を設計し、木匠に制作させ、自ら使用した。書房では、私的な来客と風流に浸り、香や書を楽しむ。書房には、書案、書櫛、扶手椅、花几などが配置され [17]、書案上には、「文房四宝」すなわち、硯、墨、筆、紙をはじめ硯屏、文鎮、奇石などの賞玩品が配置される。書房は、本来は書を読み書きする場所をいい、室内に配置される中心的家具は「書案」である。案几類の分類について、中国の既往研究では、その形態により「案」と「桌」に分類される [18]。

「書案」は、書の読み書き用のみに使用するのではなく、文房具などを賞玩するためのものであることから、形態によるものではなく、用途により、その名称があると考えられる。先述した「文房四宝」は単なる道具ではなく、書房を洞天化し、隠逸の場所とするための室内意匠としての文房具である。例えば、米芾『硯史』は、硯についての書であるが、硯を道具として実用性第一としながら、観賞については色の美しさ、形成や音色などについて論述される [19]。書案上に精神性のある賞玩品を配置し、室内に器玩、花、香、盆景を配置し、精神の隠逸、すなわち洞天化することを求めた。

4.2 「養生法」と室内意匠について

「養生法」について記述される最初の文献は、王如錫三（明）編集『東坡養生集』であり [20]、養生にかかわる蘇軾の言説の集大成である。第1巻は食養生にかかわる内容であり、第2巻は医学と薬について記述される。養生とは、病気を治すのみの意ではなく、健康を保つ意である。文房四宝などの賞玩や書画などの観賞をすることは、精神の栄養となり、養生法の実践になる。

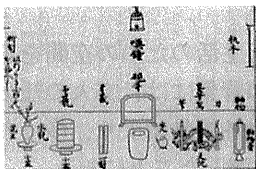


図1 文房飾り図

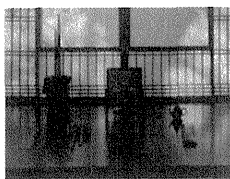


写真1 書院飾り

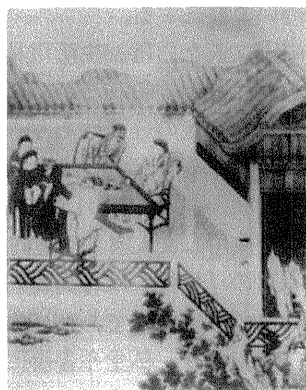


図2 「翡翠軒」34回挿図

また、『遵生八牋』にも養生に関する記述がみえる。第1牋は養生の道を説き、第2牋は四季の養生法、第3牋「起居安楽牋」は快適性を得るための数々の施設や道具について説かれる。第4牋は健康長寿法、第5牋は食品、菓膳・保健薬など、第6牋は毒画鐘鼎の鑑賞法、花竹盆栽の作り方など、第7牋は服薬と処方、第8牋は高隱の士の蹟について記述される。これらの書に共通するのは、道教の道士や医者が書いたものではなく、文人による養生法の実践のための書であることである。その記述内容は、健康のための身体的修行の範囲にとどまるのではなく、住まい、日用器物、書画、花の観賞法にまでに至り、ものごとへの精神的対処を含む。骨董品を貴ぶことは長寿に通じ、文房具を賞玩することは心身の健康につながるということが説かれる。先の南宋・趙希鵠『洞天清祿集』にみえる文房具は、古硯、古琴、古鐘鼎彝器、怪石、硯屏、筆格、水滴、古翰墨真蹟、古今石刻、古画十種類であり、墨、紙、筆はみえない。文房具の賞玩については『遵生八牋』、『考槃余事』、『長物志』において確立したことが明らかである。しかし、日本の書『君台観左右帳記』にみえるような文房飾り図（図1）や書院飾り [21]（写真1）にみえるような書案上の文具類の数量や配置場所などについての規則に関する記述はみえないが、拙政園（蘇州）内の書案上の文房飾りや上海博物院の明清家具館展示の書房家具の事例などにより、硯、墨、筆、紙などの配置について、一定の慣習があったものと考えられる（写真2、3）。

文人は「文房四宝」を賞玩し、室内意匠を設計し、書画などを創作する生活を過ごしていた。文人たちは、精神の満足や養生法の実践を行い、美的生活のための家具、文房具、生活用具、室内空間を設計した。

4.3 「翡翠軒」の室内意匠について

西門慶邸の花園内に建つ翡翠軒についての記述は、27回の一節（這西門慶近來遇見天熱，不曾出門，在家散發披襟避暑。在花園中翡翠軒捲棚內，看著小廡每打水澆花草。只見翡翠軒正面栽著一盆瑞香花，開得甚是爛漫）や34回の一節（那應伯爵狗也不咬，走熟了，同韓道國進入儀門，轉過大廳，由鹿頂鑽山進去，就是花園角門。抹過木香棚，三間小卷棚，名喚翡翠軒，乃西門慶夏月納涼之所。）にみえる。翡翠軒は、一明兩暗形式 [22] の書房であるとともに、納涼の場所であり、應伯爵や韓道國など、私的な友人を接待する場所であることがわかる。

花園に関する記述は、19回の一節（正面丈五高，心紅漆綽屑，周圍二十板，砧炭乳口泥牆。當先一座門樓，四下幾多臺榭。假山真水翠竹蒼松，高而不尖謂之臺，巍而不峻謂之榭。論四時賞玩，各有去處：春賞燕遊堂，檜栢爭鮮；夏賞臨溪館，荷蓮鬪彩，秋賞疊翠樓，黃菊迎霜；

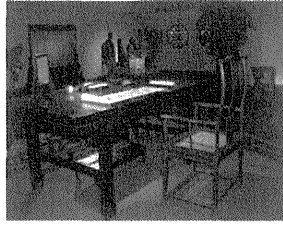


写真2 文房四宝(拙政園) 写真3 画案(上海博物館)

冬賞藏春閣，白梅積雪。剛見那嬌花籠淺徑，嫩柳拂雕欄。弄風楊柳縱蛾眉，帶雨海棠陪嫩臉；燕遊堂前，金燈花似開不開；藏春閣後，白銀杏半放不放。平野橋東，幾朵粉梅開卸；臥雲亭上，數株紫荊未吐，湖山側，纔綻金錢；寶檻邊，初生石筍。翩翩紫燕穿簾幙，啞啞黃鶯度翠陰。也有那月窗雪洞，也有那水閣風亭；木香棚與茶口架相連，千葉桃與三春柳作對；也有那紫丁香，玉馬櫻、金雀藤、黃刺薇、香茉莉、瑞仙花。捲棚前後，松牆竹徑，曲水方池，映階蕉棕，白日葵榴，遊魚藻內驚人，粉蝶花間對舞；正是，芍藥展開菩薩面，荔枝擎出鬼王頭。)にみえる。四季折々に楽しめるように、池を中心に樹木、草花、石が配置され、自然景観の再現がされ、書房は、自然の中にあることが重要であることがわかる。

このように、自然景観を再現した花園は、文人の精神と同様に自然の中に住まう隠逸のためであるが、それと同時に花園の規模などにより、財力を誇示するものである。

「軒」は、古くは、輦前の馬に連なる部分をさし、車の意であったが、のちに捲棚頂の小舎の意になる[23]。

記述にある「捲棚」は、屋根形式のひとつであり、形態の特徴は、屋根中央部に棟を使用せず、両端斜面を曲線で仕上げるものであり、蘇州園林建築に多くみえる[24]。

室内意匠についての記述は、34回の一節(伯爵見上下放着六把雲南瑪瑙漆減金釘藤絲甸矮矮東坡椅兒，兩邊掛四軸天青衢花綾裱白綾暹名人山水，一邊一張螳螂蜻蜓腳封書大理石心壁畫的幫卓，卓兒上安放古銅爐、流金仙鶴。正面懸著『翡翠軒』三字，左右粉箋吊屏仁寫著一聯：『風靜槐陰清院宇，日長香篆散簾攏。』伯爵于是正面椅上坐了，韓道國拉過一張椅廣打橫。畫童後進請西門慶，去了良久。伯爵走到裏邊書房內，裏面地平上安着一張大理石黑漆縷金涼床，掛著青紗帳幔；兩邊彩漆彩描會書廚，盛的都是送禮的書帕二上尺頭，兒席文具書籍堆滿；綠紗窗下安放一隻黑漆琴卓，獨獨放著一張螺甸交椅。書篋內都是往來片柬拜帖，並送中・秋禮物帳簿。)より知ることができる。

室内には、東坡椅、幫卓(卓上には仙鶴をモチーフにした香炉が配置される)、涼床(大理石の寝台)、書廚、琴卓、交椅が配置され、書案についての記述にはみえない。このことは、『金瓶梅』の作者からみた官商の

書房の形式を示すものであると考えられる。拙稿で検証したように、書くために必要とする書卓が配置されていないわけではなく、身分により、商人西門慶には、「書案」の名称が使用できなかったことを示すものと考えられる[25]。

該当する挿図には、八仙桌と六脚の「東坡椅」が配置され、酒宴が行われている様子がみえる(図2)。八仙桌は大型の来賓用の特別な方桌の別称であり、この呼称は八仙に由来する。

4.4 翡翠について

古く中国では、翡翠は、カワセミ(鳥)を指す語彙である。「翡翠」はカワセミ、ヒスイどちらにも読める[26]。翡翠は、学名は硬玉であり、「玉中之王」とされ[27]、玉(ぎょく)は美しい石の総称であり、文人に大変好まれた。

古く中国における翡翠の青緑色は「豊穰・生命・再生」のシンボルであり、ヒスイ石は、神仙思想では特殊な方法で加工すると不老不死の靈薬(仙薬)になると信じられていた。

ヒスイは、蘇軾「芙蓉城」の「翡翠屏」、白居易「長恨歌」の「翡翠衾」にみえるように、カワセミの羽を意味する[28]。ヒスイは装飾品のみでなく、生活用品、文房具などにみえ、ヒスイ石は、文人、士大夫、豪商たちに最も好まれた玉であることより、西門慶の書斎の名称「翡翠軒」は、ヒスイ石に由来してつけられたと考えられ、その名称より「不老不死」の願いとともに、「豊穰・生命・再生」の願いがこめられていると考えられる。

5. 「東坡椅」復元の試みと装飾モチーフ

5.1 文人設計家具について

北宋の文人・蘇軾(號を東坡、1038-1101年)が設計し、愛用した椅子であり、東坡椅と称される。その形態と用材が不明とされていた「東坡椅」について、文献資料から、寸法、形態、装飾、用材を推定し、設計思想について検証する。

中国文人たちは、生活用具と生活のための空間を設計したことが知られるが、その背景には、文人の社会的身分と明代の経済性あり、対外貿易により、多くの高級用材の輸入と木工技術が発達したことにある。

文人は、趣味に調和し審美眼に見合う、寸法、装飾、用材を使用し文人家具や室内環境を設計した。例えば、午睡用の「竹榻」は『長物志』に「短榻」がみえる。俗称は「弥勒榻」であり、坐面は低く、羅漢床より小さい榻であり、仏堂や書房に配置される三屏式榻である。竹製なので、風通しがよく、冬季は被布して使用していたと考えられる。「欵床」は、籐または竹製のた

め、軽量であり、躺椅の形態に類似する坐臥具であると考えられる。

「二宜床」は、「欵床」と同じく『遵生八箋』にみえ、夏用の涼床であり、三屏式で四隅に柱があり、帳を掛けて使用する。冬には板を嵌めこみ、壁をつくる。そして、葫蘆(ひょうたん)に香や花を挿し香りで囲まれるように工夫される。夏冬両用であるため「二宜床」と称する。詳細な形態は不明であるが、身心の養生を目的とした、実用的な坐臥具であったと考えられる。

「滾凳」は、「脚凳」の類型であり、中間に軸をつけ回転し、湧泉穴(経穴)を刺激し血液の流れをよくするために設計されたものである(表1)。

文人設計家具は、用材の香り、硬さ、手触り、音、色澤(色と艶)や紋理(木目)などの感性的側面を追究し、滾凳による血行促進や坐具背もたれのS字曲線などにより快適性を追究し、設計されていたことが明らかである。このような設計思想が家具・室内意匠の構造形態・意匠を形成したことが明らかになった。

表1 文人設計の家具一覧

文人名	時代	名称ほか
蘇拭 (1038-1101)	北宋	東坡椅『金瓶梅』にみえる書斎等に配置 同書の「醉翁椅」は、現段階で設計者不明
黄伯思 (1079-1118)	南宋	「燕几図」は、宴会に使用する卓の形と配置の仕方に関する書、タングラム七件几桌組家具、七星桌面、七巧板
戈汕 (不祥)	明	「蝶几図」、三角形桌の組家具、七巧几桌
不詳	明	「匡几図」、組家具、套几
魯斑 (不祥)	明 (編)	「魯斑経」、建築の营造方式と家具設計の経典であり制作法規と形成30余种
曹明仲 (不祥)	明	琴桌(琴案)、その上には盆景(盆栽)や古石を配置する
屠隆 (1038-1101)	明	野遊輕便家具: 疊桌二張、疊几(小几)、衣匠(手提箱)、提盆(提重)、滾凳(脚凳)
高濂 (明、万曆)	明	仙椅(禪椅の一種)、二宜床(夏冬兼用床)、欵床(読書、休息用高低可変式)
唐寅 (1470-1523)	明	唐寅の《韓載夜宴図》、模写本に原本にない桌、案、発、屏など、画屏『琴、棋、書画人物屏』に30件の家具設計がみえる
仇英 (1493-1560)	明	仇英の模写《清明上河図》には原本にある方桌、長凳が減少し、長橋台が増加して帯托泥方桌や帯尾長桌などの高型家具設計が示される
李漁 (1610-1680)	清	涼机、煖椅(折り畳み式寝椅子)、煖椅は、身体によく、案、臥床、香炉、轎の役目をもつことが記述される。躺椅、睡翁椅

表2 蘇州様式の代表的用材

樹種名	別名	学名
花梨木	花欄木	Ormosia henryi
香楠木	楠木	Phoebe nanmu
鉄梨木	鉄力木	Cassia siamea Lam

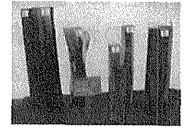


写真4 硬木用材見本

表3 名称一覧(写真4に対応)

	用材名称	学名	英文名
1、2、3	紫檀木	Pterocarpus santalinus	Red sandalwood
4	黄花梨木	D.odorifera t.chel	Huang huall wood
5	酸枝木	Dalbergia cochinchinensis	Siam rosewood
6	烏木	Diospyros ebenum	Ceylon ebony
7	鶏翅木	Cassia Siamea	Djohar

5.2 用材について

中国伝統的硬木の用材は、紫檀、花梨木などがあるが、そのうち、蘇州様式にみえる文人が好んで使用した文木は、花梨木、香楠木、鉄梨木の3つが代表とされる(表2)。上海博物館に展示してある伝統的な硬木用材を示す(写真4、表3)。

『金瓶梅』49回にみえる酒器などをのせる台「烏木春台」は、烏木が用材であることがわかる。烏木とは、烏文木(うぶんぼく)とも呼称され、日本では一般には「黒檀」として知られる。

特に文人に好まれた用材は「花梨木」や「烏文木」であり、文木ともいう。文人に特に注目されたのは、用材の硬さ、色澤や紋理(木目)であり、用材の香り、音も重要とされた[29]。明代家具は清代家具に比べ、加飾が少なく、特に色澤や紋理が重要であった。

「黄花梨木」は花梨木の古木であり、その色澤はオレンジ色であり、美しい紋理であることから、当時の最高級品とされ、明代文人に特に好まれた。

「東坡椅」の用材の推定について、上海博物館・王正书氏、蘇州高級工芸美術師・钟錦徳氏に聞きとり調査を行なった結果、「黄花梨木」を用材とする可能性が高いとの知見を得た。

以上のことより、「東坡椅」の用材は、「黄花梨木」であることが推定され[30]、坐面の部分が籐張りであったと考えられる。

5.3 復元の試みと装飾モチーフ

『金瓶梅』にみえる坐具より、これまで実体の見えなかった「東坡椅」の形態および用材を推定し復元を試みる。東坡椅の説明がみえる、おもな資料の内容を示す[31](表4)。高さなどの寸法は、他の椅類より推定する。一般的な扶手椅は、椅盤前755mm、後610mm、

深さ 605 mm、座高 518 mm、通高 1085 mmである。「東坡椅」のおもな資料および挿図より、坐高は低めであり、380 mm程度であると推定した(図 3)。扶手と後腿の交差部分には、如意紋の牙子が見える。東坡椅は、59 回の一節(…上首列四張東坡椅、兩邊安二條琴光漆春凳)にも見え、妓院(愛月軒)の明間にも配置されていることから、男性専用の坐具であることが明らかである。

四出頭官帽椅の塔腦(塔肩、日本名は笠木)の形態は、「幞頭」をモチーフにしていたことが知られる。

日常的には、官僚は烏紗帽をかぶっていたが、儀礼の際には、左右の角を上に向けてかぶっていた。

椅子は、上部の塔腦がもっとも目立ち、塔腦の形態によって椅子全体の表現された造形芸術に影響する。

東坡椅の塔腦の形態のモチーフについて検証した結果、太師椅(清代)にみえる靈芝紋の初期の段階の形態がみえることがわかる。

「靈芝」は学名 *ganoderma licidum* であり、サルノコシカケ科のキノコ(別名は仙人草、マンネンタケ)である。仙人の住む深山で採れ、「不老長寿」の靈薬として珍重される[32]。

蘇軾が設計し、愛用したとされる「東坡椅」は、背もたれはS字曲線であり、座面の高さは低く、「滾凳」に足をのせ、非常にリラックスした姿勢がみえる(前掲図 2)。このことより、書房に配置される養生法実践のための坐具であることが明らかである[33]。さらに塔腦の裝飾モチーフは「靈芝」であると考えられ、不老不死の願いがみえる。その形態および裝飾題材から、養生と安寧のための椅類であり、清代の太師椅の塔腦意匠の起源になったものと考えられる(写真 5)。

表 4 「東坡椅」がみえる文献一覧

資料名	内容
『金瓶梅小考』	東坡椅就是靠背椅*1
『金瓶梅詞話校註』	帶有靠背的交椅
『金瓶梅鑑賞辭典』	藤編的椅面*2、矮足靠背的椅*3
『漢語大詞典』	有靠背可折疊的椅子
『萬曆野獲編 上冊』	胡床之有靠背

*1 靠背は背凭れの意、*2 藤は籐と同義、*3 矮足は低い脚

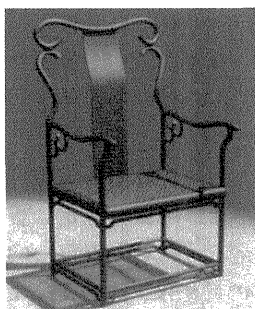


図 3 「東坡椅」CG復元図

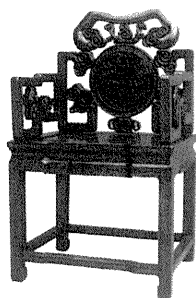


写真 5 太師椅

6. おわりに

書房「翡翠軒」を中心に、男性の私生活様式と室内意匠について検証した結果、その特徴を以下にまとめる。

(1) 士大夫(文人)たちの生活は、官僚社会における秩序的な支配階層である公的生活様式と精神性重視の私生活様式の二面性がみえる。商人西門慶は、私的接客や養生実践など、私生活様式を庭園内の書房において行った。

(2) 西門慶の理想とする「書房」は、その内外に自然を必要とする。室内には、趣味嗜好にあった家具、文房四宝を配置し、それらを賞玩することにより、精神の隠逸を求め、文人の模倣的生活様式がみられる。『金瓶梅』の作者は、商人西門慶を通して、当時の理想とされる庭園、書房を描写し、商人の生活における神仙思想を表現した。

(3) 文人設計家具は、用材の香り、硬さ、手触り、色澤や紋理(木目)などの感性的側面を追及し、滾凳による血行促進や坐具背もたれのS字曲線などにより快適性を追及し、設計されていたことが明らかである。このような設計思想が、家具・室内意匠の意匠を形成したと考えられる。

(4) 書房「翡翠軒」はその名称より、不老不死の願いとともに、豊穡、生命、再生の願いがみえる。

(5) 蘇軾が設計し、愛用したとされる坐具「東坡椅」は、書房や妓院に配置される男性用の坐具である。塔腦の裝飾モチーフは「靈芝」であると考えられ、不老不死の願いがみえる。その形態および裝飾性から、養生と安寧のための椅類であり、清代の太師椅の塔腦意匠の起源になったものと考えられる。

謝辞 本稿の作成にあたり、北海道大学名誉教授・中野美代子氏より貴重な資料とご助言をいただきました。ここに記して感謝の意を表します。なお、この研究の一部は(財)日本産業科学研究所平成19年度研究助成事業を受けて行いました。

参考文献および注

- [1] テキストとして『金瓶梅詞話校註』、白維国 ト鍵校註、岳麓書社、1995を第一次資料と使用した。本稿では、『金瓶梅詞話校註』の記述にしたがい「書齋」を示す語彙を「書房」の表記に統一する。
- [2] 清宮皇子の教育用とされる清宮宮廷秘蔵「清宮珍宝頤美図」および明崇禎刻本挿図として、瀧本弘編『金瓶梅/紅樓夢挿画集』、遊子館、2003を参照した。挿図は、当時の様相を総合的に示す貴重な資料である。
- [3] 官商とは、官僚(西門慶は、葵太師との関係により、山東提刑所副千戸となり、さらに掌刑千戸の

地位になる)という身分をもちながら商売を営む者をさす。

官商の特徴は、官僚の「権力」を生かして、商売資源を独占的、もしくはかなり有利な立場で経営することである。官商は金と権力と結託して商売するため、高い利潤が保証されている。すなわち、作者は、西門慶を通して、明代商人階級の典型を描写したと考えられる。

- [4] 石川忠久：詩経 下、新釈漢文大系 112、pp. 277-278、明治書院、2000
- [5] 蜂屋邦夫：老荘を読む、pp. 12-14、講談社現代新書、1999
- [6] 荒井健編：中華文人の生活、p. 108、平凡社、1994
- [7] 白居易（字は楽天、唐772-846年）は、文人の趣味のうち、琴・詩・酒を「三友」とよび、文人の三要素とした。三浦國夫：気の中国文化、p. 81、創元社、1994
- [8] 中田勇次郎：文房清玩一、二玄社、1961 参照
- [9] 吉田光邦：工芸の社会史、p. 63、NHK ブックス 519、1987
- [10] 中田勇次郎：文房清玩、p. 111、二玄社、1961
- [11] ここでいう「裏」は、内側、内面の意である。
- [12] 高濂：遵生八牋は、光緒甲申年重刊『増補遵生八牋』を参照した。
- [13] 屠隆：考槃余事は、中田勇次郎：文房清玩二、pp. 206-207、二玄社、1961 を参照した
- [14] 文震亨：長物志図説、pp. 14-15、山東書報出版社、2004
- [15] 一般に、隠逸とは世俗を逃れ隠れる意であるが、『広辞苑』第五版、岩波書店、1999) ここでいう隠逸は、士人の隠逸をいい、士人でない庶民や僧が山中に住んでも隠逸とはいわない。道家的隠逸は、隠逸そのものが目的化したといえる。荒井健編：中華文人の生活、pp. 19-40、平凡社、1994 参照
- [16] 最も初期の庭園は、「囿」、「苑」であり、周代帝王の狩や遊楽のために造園された。朱恵良：中国人の生活と文化、筒井茂徳ほか訳、pp. 224-231、二玄社、1994 参照
- [17] 徐民蘇ほか編：蘇州民居、p. 139、中国建築工業出版社、1991
- [18] 胡徳生：中国古代家具、pp. 16-30、上海文化、1992
卓と案にみえる身分と使用規律については、藤原美樹、松本静夫：場所を構成する家具・室内意匠について—『金瓶梅』にみられる住まいの空間構成に関する研究 その 2、日本建築学会計画系論文集、第 598 号 pp. 199-204、2005. 1 にて

検証した。

- [19] 米芾（北宋、1051-1107 年）『硯史』については、中田勇次郎『文房清玩 4』、pp. 90-119 二玄社、1961、を参照した。米芾は、北宋の書家、画家であり、晩年には宮中に召され、書画学博士になった。多くの硯譜の中で最も見識の高い書とされる。
- [20] 編者は明の王如錫三編集である。三浦國雄：気の中国文化、pp. 145-166、創元社、1994
- [21] 『君台観左右帳記』は、室町時代に成立した茶の湯の故実書、1511年編集。個々の道具については、唐物の流行により多く取り入れられ、配置については日本化されたことがわかる。大枝流芳：雅遊漫録、1755年は、『長物志』に従いながら、日本化した展開がみえる。江戸時代文人の道具について説明される。日本随筆大成編：日本随筆大成23、吉川弘文館、1974参照
- [22] 3間で構成される建物をいう。中央の部屋は「明間」、両側を「暗間」という。最も古い「一明両暗」という記述は明代にみられる俗称である。
- [23] 張家驥：園冶全釋、p. 229、山西古籍出版社、2002
- [24] 張家驥：中国建築論、pp. 122-123、山西人民出版社、2003
- [25] 藤原美樹、松本静夫：日本建築学会計画系論文集、第 587 号、pp. 215-220、2005. 1
- [26] 広辞苑第五版、岩波書店、1999
- [27] 欣弘主編：百姓収蔵図鑑 翡翠、湖南美術出版、2006
- [28] 「翡翠屏」は、日本最古の屏風「鳥毛立女屏風」の製法に類似すると考えられる。
- [29] 濮安国：我国伝統的家具用材と家具文化、家具、pp. 37-39、1998. 6 (No.106)
- [30] 「東坡椅」の用材の推定については、上海博物館・王正书氏および蘇州高級工藝美術師・钟錦徳氏より知見を得た(2007. 9 聞き取り調査)。
- [31] 陳詔：金瓶梅小考、p. 238、上海書店出版社、1999。金瓶梅詞話校註、前掲 1)、p. 929。上海紅樓夢学会ほか編：金瓶梅鑑賞辞典、p. 705、上海古籍出版社、1990。漢語大詞典 4、p. 832、漢語大詞典出版社、1997。沈徳符：萬歴野獲編 上冊、p. 663、中華書局出版、1980
- [32] 早坂裕子：日本・中国の文様事典、視覚デザイン研究所編、p. 271、2004、奥野信太郎：藝文おりおり草、仙人と仙薬、pp. 184-198、東洋文庫、1992
- [33] 官帽椅など高さは権威が象徴され、その椅子に坐る人物の役割が象徴される。

写真出典

- 写真1 宇野雪村：文房清玩、p.29、平凡社、1986
写真2 拙政園（蘇州）内の書案と文房飾り、筆者撮影（2005.9）
写真3 上海博物院の明清家具館展示の書房家具、筆者撮影（2005.9）
写真4 上海博物館 硬木用材標本、筆者撮影（2005.9）
写真5 濮安国：明清代家具裝飾藝術、p.74、浙江攝影

出版社、2001

図版出典

- 図1 君台觀左右帳、相阿弥・松翁苑本、堀口捨巳：書院造りと数寄屋造りの研究、p.134、鹿島出版会、1978
図2 清宮珍宝麗美図、中野美代子氏所蔵
図3 「東坡椅」CG復元図、筆者作成

本稿は、日本建築学会計画系論文集No.625(2008.3)に掲載予定の原稿を修正したものである。